



2000 年 (平成 12 年)

1 月号 (No. 656)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

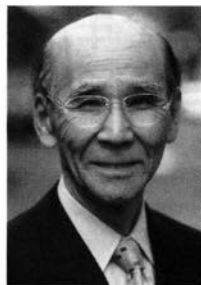
定価 1 部 150 円

目 次

2000年の新春を迎えて	1
平成11年度年次晩餐会	2
追悼・鳥居亮先生を偲ぶ	4
ダンジ氏の歓迎レセプション	5
韓国の文会長当会を訪問	5
「台湾地震募金」を贈呈	5
海外の山	6
報告	
学生・第36回マラソン大会	7
指導・大学山岳部監督会議	7
自然保護委・自然観察会	7
海外連絡委・ミレニアム会議	8
ボカラ国際山岳博物館・近状	9
図書紹介	10
「とやま県境踏破」「落ちこぼれてエベレスト」「ウォルター・ウェストン未刊行著作集」	
東西南北	
田村氏の「なぜ、仮題『(新)日本山岳志?』」に答える	11
藤木九三さんの葉書	11
ラリグラス植林に参加	12
短歌・西方ヶ岳	13
カナダで山岳図書、山岳映画祭	13
支部だより	14
越後 信濃 岐阜 宮崎	
新入会員・図書受入報告	16
会務報告	17
会員異動・ルーム日誌	18
INFORMATION	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10~20時
水・金……………13~20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

二〇〇〇年の新春を迎えて



日本山岳会会長 大塚博美

年頭に際し会員の皆さまにご挨拶できますことを大変うれしく存じております。この折に、就任以来半年とこれからの一年について、ご報告と所信を述べたいと思います。

私はじめ理事一同、クラブサパーの心がけて会務に専心してまいりました。昨年末の年次晩餐会は六百二十一名の参加を得て、盛会裡に終了いたしました。本会は会員数五千九百九十一名、平均年齢五八・一歳と、高齢化の傾向ですが、私は壇

上から、会場に満ちた長老から新入会員までの風景を眺めたとき、何ともいえないいい雰囲気を感じました。これがJAC九十五年の長い歴史が培って醸し出す伝統だと思いました。このいい風景を共有できる会員の一人であることにいささかの誇りを感じた次第です。

就任以来、六月のウェストン祭を皮切りに、理事ともども手分けして九支部の記念事業、登山に参加し、ともに語り、汗を流して見聞を深め、勉強させてもらいました。そこで改めて痛感いたしましたことは、JACは「山に登るクラブ」だということでした。あたりまえのことですが、

一人一人の会員が、好きで入会し、自由に登山する。六千人の会員が皆平等の立場にあるということは大切な事実だということでした。

会はその流れを途絶えることなく継続しておりますが、これが活力となり、伝統となっております。

本会独自の山岳賞である第二回「秩父宮記念山岳賞」は推薦にふさわしい応募なし、ということが残念ながらパスしましたが、この経験を活かして本年は規則の再検討をしておりますので、奮ってのご応募を願っております。

前会長から引き継いだ、初の学生による日中交流の「四川省雪宝頂合同登山」の成功、今夏、カナダ山岳会と合同事業の「アルバータ登頂七十五周年記念 登山とトレッキング」の催し、会員の皆さんには、ぜひとも振るってこの事業にご参画をお勧め

めいたします。

「活力ある登山活動」の推進としては、国内、国外にトレーニングキャンプを設け、若手を中心とした層に活動の場を提供したいと思っています。このプランはかつての海外登山、国内研修、講習会の復活というもので、ことさらに新しいものではありませんが、活性化の手段方策として検討中であります。

最後に、晩餐会でも私の希望としてお話ししたことが、「クラブソングの制作」についてであります。長い歴史のJACに、皆で歌える会にふさわしい愛唱歌がないというのが不思議でした。会場で皆さんに聞かれましたところ、拍手が多数ありましたので、クラブソングの制作に第一歩を踏み出そうと思っております。その折にはご協力をお願い申し上げます。

平成11年度年次晩餐会 2000年に向けて発展を誓う



621人が出席して、華やかに、盛大に開会された年次晩餐会

■出席者は六百二十一名

平成十一年度の年次晩餐会が十二月四日午後六時から、東京・品川の新高輪プリンスホテル国際館パミール三階「北辰」で開かれた。

この晩餐会には、橋本龍太郎会員ら六百二十一人の会員が出席、また来賓として、ネパールからマナスル登山隊にご縁のあるバンディ夫妻、台湾から蔡禮樂名誉会員（中華民国山岳協会名誉理事長）が参列した。

■会長挨拶

「六千人の力を結集しよう」

冒頭、大塚博美会長は、次のように挨拶した。

一、五月に会長に就任して以来、全国の支部を回っている。日本山岳会の歴史と伝統をよくわかってもらうためだ。会員は、十一月末で五千九百八十五人となった。二〇〇〇年を迎えるときには六千人になっているだろう。しかも質の高い会員だ。二〇〇五年には創立百周年を迎えるが、この六千人の力を結集すれば、相当の仕事ができると確信している。

一、ことは学生部が初めて中国の学生と交流登山を実施し雪宝頂に登頂した。来年八月に予定しているカナダ・アルバータ登頂七十五周年記念の登山・トレッキングは着実に準備が進んでいる。第二回秩父宮記念山岳賞は該当がなかったが、来年に期待したい。「日本山岳会百年史」、「新日本山岳志（仮）の編纂、また白神山地でのブナの植林も進んでいる。一、最後に、ひとつ提案したい。それは、日本山岳会にクラブソングをつくってはどうか、ということだ。賛同が得られれば、ぜひ進めたい。」

このクラブソング制作の提案には、大きな拍手がわき起こった。大塚会長は「JAC山の歌または応援歌などを機関誌『山』で募集したい」とし、挨拶を締めくくった。

■クラブソング提唱に大きな拍手

続いて、三十九人の物故会員に対して黙祷した。心からご冥福をお祈りいたします。

来賓挨拶があり、蔡禮樂名誉会員は「さきの大地震で二千五、六百人が亡くなり、行方不明者がまだ二百人ほどいる。山岳協会の隊員も十五人失ったが、皆さまから義援金をお願いしたい。貴重な資金を復興に役立てたい」と挨拶した。

皇太子殿下からのメッセージが披露された。殿下は、ベルギーのフィリップ皇太子の結婚式出席のため欠席された。「外国旅行のため大変残念ですが、欠席します。出席の皆さまによりしくお伝えください」と、



①挨拶する大塚会長 ②談笑する橋本会員（前総理）、ネパールのパンディ氏、斎藤新名誉会員（前会長） ③学生部による9月の日中学生友好登山隊、学習院大学輔仁会山岳部の中国レッドメイン初登頂の報告も ④吉田喜義氏製作の1920年代から、マナスル登山、南極観測、植村直己さん北極行などミニテントを展示 ⑤カナダ・アルバータ登山75周年記念の登山、トレッキングにちなんだ展示。スケッチ、フォトビデオクラブの絵画、写真展も開催された。

大塚会長が披露した。

■名誉会員・永年会員の紹介

ことしの新名誉会員は斎藤惇生前会長（五三七三）、新永年会員は三十人である。それぞれ大塚会長から名誉会員章、永年会員章が手渡された。大塚会長も永年会員となり、会員章が事務局から手渡される一幕があり、一段と大きな拍手があった。

斎藤・新名誉会員は「九十周年記念晩餐会のときに名誉会員になられた梅棹忠夫さんが、いろんな賞をもたらしたが、日本山岳会の名誉会員がいちばんうれしい、と述懐されておられた。私も同感だ。昭和三十七年、サルトリカナン登山の際に入会した。以来の経験を踏まえ、日本山岳会の発展につくしたい」と挨拶。また新永年会員を代表して金森繁三郎会員は「加藤文太郎の書に引かれ山にはいった。その何十分の一にも至らず半世紀を迎えた。日本山岳会には厚く御礼申し上げたい。母なる日本山岳会に微力を尽くし貢献したい」と語った。

新永年会員

平山武志（一八三七）、池田知幸（三三六九）、中村彰志（三三七二）、松本吉正（三三七五）、小田部学（三三八五）、岡本丈夫（三四〇五）、

藤井健（三四二五）、望月雅郎（三四五〇）、渡辺純一（三四六三）、松葉明（三四七一）、村木潤次郎（三四七二）、山田二郎（三四七三）、田原善治（三四九四）、松丸秀夫（三五〇三）、大塚博美（三五一四）、石井貞吉（三五二五）、垣内康時（五三一）、金森繁三郎（三六三七）、坂本矩祥（三六三九）、高橋一雄（三六四二）、澤井貞夫（三六七四）、佐々木淳義（三六七九）、稲垣一郎（三七〇四）、山本朋三郎（三七一三）、松長晴利（三七一六）、田中昭男（三七二四）、高島眞一（三七二九）、永田好行（三七三〇）、青柳安昭（三七四〇）、太田繁（三七四四）

■新入会員は二百三十九人

恒例の鏡開きは、大塚会長、斎藤前会長のほか、パンディ、蔡禮樂、小田稔の各氏が行った。酒は故今西壽雄名誉会員夫人から寄贈のあった「四海王」。川崎精雄名誉会員の音頭で乾杯し会食にはいった。

六十三のテーブルには、富士山をはじめ穂高岳、北岳など山の名前がつけられている。それぞれの席でテーブルマスターが、歓談を盛り上げる。テーブルにも酒が用意されていた。墨書きのラベルには「自然を愛し山に親しむ 今西壽雄」とあった。会食をはさんで、新入会員の紹介

があった。昨年の晩餐会以降、二百三十九人が新しく入会した。新入会員を代表して、遠藤京子さんは「日本山岳会の伝統をひしひしと感じている。人生は山あり谷あり。ご縁があつて一緒にさせていただいて、これからの人生は、より趣深いものになると思います」と挨拶した。

続いて支部会員の紹介。全国二十四支部から百八十五人が出席した。北海道支部は支部設立三十周年、秋田支部は四十年、山陰支部は五十年を迎えた。岐阜支部は十月に全国支部懇談会を大垣で実施した。来年は東九州支部が別府で開催予定。

■皇太子殿下が写真を特別出品

すっかり恒例になったが、ことしも慶雲の間で、アルパインスケッチクラブとアルパインフォトビデオクラブの絵画・写真展が開催され、この写真展に皇太子殿下が、特別出品された。「那須岳 紅葉」である。御用邸から出かけられたのだろう。青空と那須岳の噴煙と灌木の紅葉がコントラストをなしてさえわたっている。たしか、あの噴煙は行方定まらないのだが、それがしっかりと収まっている。シャッターチャンスに苦労されたのではないだろうか。

白雲の間では、午後二時から、学生部が、九月に行った日中合同登山

隊による中国四川省・雪宝頂登頂報告、また学習院大学輔仁会山岳部による中国四川省・レッドメイン初登頂の報告があった。学生部は「合同登山の成功で日中學生による合同登山の足がかりができた。北京大学の山岳部は活発に活動しており、友好を保つていきたい」などと報告した。

カナダ・アルバータ登頂七十五年記念の登山・トレッキングについて説明会があった。芳賀淳子会員が七十五年前に頂上に残したピッケルにまつわる秘話を改めて披露、実行委員会から八十枚のスライドを使つてルート紹介があり、参列者は登山・トレッキングへの想いを募らせていた。

ミニチュアテントの展示もあった。マナスル登山隊が使用したもの、植村直己さんが工夫・愛用したものなど十四張が展示された。このことは、機関誌「山」十一月号で紹介したが、製作者である吉田喜義さんが高齢にもかかわらず、会場にこられ、熱心に説明されていた。

年次晩餐会は、会食だけでなく多彩な催しがあり、例年楽しい集いとなる。設営から運営まで苦労された実行委員会の皆さんに感謝したい。

翌日の懇親山行は、茨城・筑波山で行われた。

(写真・村井葵、文・高橋重之)

追悼 鳥居 亮 先生を偲ぶ



森 武昭

会員番号一九三四の鳥居亮先生(神奈川工科大学名誉教授)が、平成十一年九月十一日に逝去された。ご家族の意向で、四十九日が過ぎた十一月十一日にこの悲しい事実が初めて関係者に知らされた。

鳥居先生は、筆者の勤務先の大先輩で、昭和五十八年に先生がそのころ手がけていた北アルプス穂高岳山荘の風力発電の研究を補完するために、筆者が太陽光発電の実用化研究を行うようになってから、亡くなる直前までご指導をいただいていた。

自然エネルギー発電にかけた先生の熱意は大変なもので、穂高岳山荘に始まって、笠ヶ岳山荘、双六小屋、丹沢尊仏山荘、白馬尻山荘、奥秩父三條の湯など、随分こじらせていただいた。先生は実直な人柄で、普段は物静かな語り方であったが、鹿兒島県人らしく苦瓜をつまみに焼酎

が入ると、自然エネルギーにかける夢に熱弁を振るわれたのが忘れがたい思い出である。

先生が殊のほか喜ばれたのは、国内外における山荘地域における自然エネルギー利用の実用化研究の実績で、平成七年三月に本会などの推薦を受けて、先生が代表者となり筆者らとともに、日本学術振興会が制定していた秩父宮記念学術賞を受賞したことであろう。この受賞が一つの契機になって、本会上高地山岳研究所でミニ水力発電の実用化研究を行うことになった。このプロジェクトは、いろいろと困難な問題に直面して実現が遅れていたが、ようやく平成十一年十一月になって試運転実施の運びとなった(二月号に掲載予定)。計報の知らせを受けて奥様にお悔やみの電話をしたところ、先生は亡くなる直前まで、「上高地に行つて実験をしなくては……」とか、「一時間実験をしたら疲れた……」と最後まで情熱を傾けていたことをうかがい、胸がつまる想いを禁じ得なかった。十一月二十二日上高地で行った水力発電の試運転では、坂本山研担当理事の配慮で先生の遺影が飾られ、その中で無事試験を終えることができた。

帰京後早々に、小倉副会長(ミニ水力発電実行委員長)、坂本理事と

ともに先生のお宅にうかがい、ご靈前に試運転の結果を報告した。報告を終えてほっとした気持ちになる一方、いろいろな事情があったとはいえ、先生の生前に吉報を報告できなかったことが大変残念であった。

先生のあの強い熱意を受け継いで、本年からのミニ水力発電の本格的稼動を成功させるとともに、この環境に優しい発電を使つて、環境を保全しようとの理念を広く世に訴えて普及に努めていくことが、先生への最大の供養になるであろう。

心から先生のご冥福をお祈りいたします。享年八十二歳。

ダンジ氏の歓迎レセプション

昨年の十二月二日、ネパール大使公邸において、ネパール政府観光局T・B・ダンジ氏の歓迎レセプションが開かれた。マテマ駐日大使の挨拶のあと、ダンジ氏は七月に改定になったビザ関係法令の説明を行ったほか、観光推進用のCD・ROMを駆使して、山岳ばかりではないネパールの魅力を力説した。エベレストの標高は八八五〇メートルであるとのアメリカ、中国の報告に、ネパールは公式に同意する予定である、と述べたのが注目される。

国内から日山協の坂口会長ほか、

ネパールと関係の深い五十名ほどの参加者があった。(増山 茂)

韓国の文会長当会を訪問

十一月四日夕方、韓国山岳会の文熙晨会長が当会を表敬訪問された。文会長は当会の会員で、日本の山にも登っている親日家である。

急な来日にもかかわらず、大森副会長以下十八名の会員が参加し、午後七時から新宿中村屋で歓迎パーティーが開かれた。参加者の大半が韓国の山を登ったことのある人たちで、日韓の登山談義に花が咲いた。

かつて「近くて遠い国」と言われた韓国とも、近年では交流が盛んになってきていることを感じさせる一夜であった。(西村政晃)

「台湾地震募金」を贈呈

十二月四日の年次晩餐会に先立ち、本募金世話人代表・藤平正夫ほか二名は、晩餐会出席のため来日中の中華民国山岳協会名誉理事長・蔡禮樂氏を訪問。十一月末日までの募金を贈呈した。晩餐会のスピーチで、蔡氏より深甚な謝意の表明があった。本募金は十二月十五日をもって終了。残金処理などの報告は応募各位宛改めてご連絡します。(木村俊博)

砂に埋もれた ホータンの廃墟

SAND-BURIED RUINS OF KHOTAN

オーレル・スタイン[著] 山口静一・五代 徹[訳]

シルクロードの砂に埋もれた古代都市を発掘・調査し、現代への偉大な文化遺産として貢献した探検家・考古学者の第一回踏査行の記録。その志と業績は百年の時空を隔てて今よみがえる。(写真130点・カラー地図1葉)

■A5判 458頁 定価(本体7600円+税)

中央アジア 踏査記

【新装版】

オーレル・スタイン[著]

澤崎順之助[訳]

中央アジアの砂中に眠るオアシス都市の廃墟を発掘して膨大な遺物を収集し、シルクロードに花開いた特異な文明の相を明らかにしたイギリスの探検家・考古学者の三次にわたる踏査行の全貌を示す記録!

■四六判 320頁+写真10頁

■定価(本体3400円+税)

■1月中旬発売

白水社

101-0052 東京神田小川町3-24
tel.03-3291-7811/fax.03-3291-8448
http://www.hakusuisha.co.jp

カラクル湖南のキャンプから望むムスタグ・アタ峰

海外の山

マロリーたちの薄着
2000年に想う

1924年6月6日、マロリー(左)とアーヴィンがノースコルを出発する時の有名な写真。この装備のまま帰らなかった。

江本嘉伸

リーが七十五年ぶりに発見されたことは、何回か過去の会報でも取り上げた。そのマロリー捜索に関する著作が昨年から暮れにかけて早々に刊行された。それも一冊ではない。

少なくとも三冊がすでに発売されている。二十七歳のドイツの登山史家、ヨッヘン・ヘムレブと彼の研究をインターネットで知り、支援したアメリカのラリー・ジョンソン、それに捜索隊の隊長エリック・サイモンソンの口述をまとめた「GHOST of EVEREST—THE AUTHORIZED STORY of THE SEARCH FOR MALLORY+IRVINE (エヴェレストの幻影—マロリー、アーヴィン捜索公式報告)」、マロリーを現場で発見したコンラッド・アンカーが作家で登山家のデビッド・ロバーツと書いた「THE LOST EXPLORER—FINDING MALLORY ON MOUNT EVEREST (消えた探検家—エヴェレストのマロリー発見)」、それにまだ入手していないが、英BBC放送のプロデューサーで捜索隊に参加したピーター・ファーストブルックの「Lost on Everest—The search for Mallory Irvine (エヴェレストの不明者—マロリーとアーヴィンの捜索)」。

五月の発見の一報から随分早い刊

行だが、うち最初のヘムレブらの本は、「そして謎は残った—伝説の登山家マロリー発見記」(文藝春秋社刊)として十二月に緊急邦訳出版されている。

今回の捜索は一九二一年、二二年、二四年とマロリーが参加した英国エヴェレスト隊についてのヘムレブの近年の徹底した分析をきっかけに動き出し、隊が構成されるまで資金、メディア、メンバー選定まで相当厄介な仕事であったことがこれらの本からうかがえる。そして、興味深いのはマロリーたちが頂上まで登ったのかどうか、については捜索隊の中でも微妙に見解が分かれている、という点だ。

ヘムレブたちが、当時の酸素ボンベの数や二人が最後に見られたと思われる地点の写真などさまざまな情報からどちらかというところ「登頂した可能性」を強調しているのに対し、アンカーは懐疑的だ。「ヘムレブは一九二〇年代の三つの登山についてはまさに生き字引だったが、細かい点にこだわって木を見て森を見ることができないときがある」と書いている。積年のナゾである。カメラの発見など決定的な証拠がない限り見解が分かれるのは自然なところなのだろう。

しかし、どちらの立場でも共通しているのは、七十五年前おそろしく素朴な装備で頂上直下まで迫ったイギリス人への敬意である。

たとえば、発見されたマロリーが身につけていたものの少なさに、捜索隊員たちはがく然とする。何という耐久力、何という勇氣。

ヘムレブたちの本は、変形横長のグラフィックな作りで、マロリーの遺体と遺留品のカラー写真が大きく掲載されており、それ自体資料的価値がある(アンカーたちの本に写真がほとんどないのは、版權の問題であろう)。その衣類、用具のひとつひとつから登山というものの、本質的なものが見えてくるのである。

少なくともこの百年、私たちは知恵をふり絞って「筋肉エネルギー」の代替システムを開発してきた。歩くよりは自転車、自動車、ジェット機というように。

靴とザックさえあれば誰でもできる登山はその中であって、身を自然の中にさらしながら簡便な用具のみで筋肉を存分に使って頂に達する行為だ。

人は、千年後も生ある限り登り続けているに違いない。

マロリーたちの装備の写真は、そのことを気づかせた。

報告

REPORT
1月

学生部指導委員会

第三十六回マラソン大会

十一月十四日、恒例の皇居周回マラソン大会が開催された。今年は二十大学二十六チーム、総勢百名以上



大塚会長から優勝カップを受ける東海大学山岳部員

が集い、関西学院大OBチームの参加もあつて、熱戦が繰り広げられた。

団体戦は東海大学が明治大学の六連覇を阻んで初優勝。ジョギングで会場に現れた大塚会長より、メトロロから寄贈された大優勝カップが手渡され、大盛況のうちに幕を閉じた。

団体戦男子(一人一周×四人)

優勝 東海大学山岳部 一時間一三

分二〇秒

二位 明治大学山岳部A 一時間一

分五四秒

三位 関西学院大学山岳部OB 一

時間一七分二五秒

四位 法政大学山岳部A

五位 青山学院大学山岳部

団体女子

優勝 中央大学山岳部 一時間三六

分一九秒

二位 学習院大・早稲田大・法政大

混成チーム

個人男子(三周)

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

学生部指導委員会

大学山岳部監督会議

「学生登山」の現状と課題

十一月十三日、日本大学会館において、学生部指導委員会による大学山岳部監督会議が開催された。二十校、五十名を超す参加者があり、熱心な討議が行われた。開会に先立ち、大塚会長より大学山岳部に期待するとの檄を受け、会議に移った。

- 山岳部員と海外登山の魅力―学習院大学山岳部・永田秀樹監督
- 学生登山の安全確保と現状―日本大学山岳部・山本茂久コーチ
- 環境保全と学生登山の取り組み―日本大学山岳部・神崎忠雄監督
- 山岳部員の合同山行と展望―一橋大学山岳部・井上裕之OB

会議は右記の事例発表のあと、八

優勝 平出和也 東海大一年 五二

分五五秒

二位 安藤 豪 慶応義塾大一年

三位 天野和明 明治大四年

四位 岡本祥幸 芝浦工業大一年

五位 荻原浩司 青山学院大OB

個人女子(二周)

優勝 浜田純子 東京農大一年 四

四分五〇秒

二位 渡辺佳苗 早稲田大二年

三位 内野麻衣子 学習院大二年

自然保護委員会

東京都水道局水源林の

自然観察会

自然保護委員会主催の恒例の自然観察会が、十一月六日、山梨県塩山市にある東京都水道局所管の水源林「柳沢ゾーンぶなのみち」で行われた。八王子駅に集合した一行(参加者二十三名)は八時、貸し切りバスで出発。目的地である柳沢峠に着くまでの車中で、東京都水道局水源管理事務所の堀越弘司さんを講師として勉強会が開かれた。堀越さんからは、水源林の沿革と意義、森林の機能と役割、森林植生などについて、ユーモアも交えた詳しい解説をしていた。

この水道水源林は、明治三十四年、人口の増加により当時著しく増加した首都東京の水需要に應えるため、



紅葉の美しい柳沢峠で説明を聞く

東京府がその水がめである多摩川上流の国有林(御料林)の払い下げを受け、水源林の整備に着手したことに由来する。その後、憲政の神様といわれた尾崎行雄東京市長は、森林の荒廃状況を自らの視察で知り、水源地の森林復旧は、市民に給水の責任を負っている東京市が行うべきものとし、明治四十三年、府有林、山梨県有林の譲り受けや民有林の買収を行い、本格的に水源林管理を開始した。現在は東京都水道局の水源管理事務所の管轄になっている。管理区域は、東京都と山梨県の一市一町二村にまたがり、水道専用ダムである小河内ダム上流域の森林の七割を占め、二一六〇〇ヘクタールに及ん

でいる。地方自治体が所管する水源林としては、全国でも飛び抜けて大きいものだという。

七割がブナ、ミズナラ、トウヒなどの天然林、三割がヒノキ、カラマツ、スギの人工林となっている、水源林管理の基本方針としては、従来は森林復元に際して木材の収穫を視野に入れた森づくりが行われたが、昭和五十七年の台風被害の反省から、今は水源涵養、土砂流出防止および水質浄化機能の発揮と自然環境の保全に努めることを主眼として、天然林はそのままの森林の維持を図るとともに、人工林については、広葉樹への誘導を目指すことにしている。私たちがいつも飲んで恩恵を受けている水道の水が、こうした先人の努力により供給されているということに感動を覚えた。

観察の現地は、水道局が水源地ふれあいの道として整備した観察コースで行われた。このあたりは、標高一五〇〇メートルに位置しているため温帯の上部にあたっている。ブナ、ミズナラ、ハウチワカエデなどの温帯性広葉樹を主体に、トウヒ、シラベ、ウラジロモミなどの亜寒帯性の針葉樹が混じる鬱蒼とした天然林である。観察コースは落ち葉が散り敷かれていてふかふかと足に優しく感

じられた。このスポンジ状の団粒構造土が、雨水を蓄え浄化する「緑のダム」といわれるものだ。樹齢百年を超え、直径が一メートルに達する巨木も多く、堀越さんを輪にして、一本一本立ち止まっては樹木の特徴や種の見分け方について説明を聞く。木肌の白いブナと灰色のイヌブナは、葉の質感にも違いがあった。樹皮が鹿の子模様にはがれていて紛らわしいナツツバキとリョウブ、節のふくらみ具合で見分けられるミヤコザサとスズタケ、皮をはぐとサロメチーロのおいにするミズメ、イチイとウラジロモミの葉の手触りの違いなど、五感を動員した観察に歓声が上がった。カエデ類は八種類ほどもあり、色づいて足元に落ちたばかりの葉を拾い集めて、その形の違いを観察した。

笠取山、唐松尾山などの多摩川源流部が一望できる梅ノ木尾根で、透き通った空気を肌で感じながらお昼を摂り、参加者間の親交も深めることができた。晴天に恵まれ、紅葉の盛りの秋の一日を満喫するとともに、このすばらしい森林が今後ともしっかりと保全されるであろうことを確信した大変有意義な観察山行であった。十五時十分現地を後にして、高速道を経由、十八時十分八王子駅解散。

(龍久仁人・川越尚子)

海外連絡委員会

インド登山財団による 国際ミレニアム会議

次のミレニアムを目指してと意気込んだ国際会議。本来は一九九九年十一月十二〜十四日の間、ナンガパルバットを南から望むカシミールのグルマルグで行われる予定であった。しかし、直前になって緊急電が入り、スリナガル情勢の悪化のため急遽場所日時とも変更、十一月十五、十六の両日、デリーのIMF本部での開催となった。そして本会からは大塚会長の代理で私が参加した。

急遽変更となったせいも、参加者も百人程度と少なく、会議のプログラムからは当初予定されていたネパール山岳会会長や米国山岳会代表の発言は削られていた。外国人の発表は、国際山岳連盟会長のデイビス氏、英国山岳連盟会長のバンド氏、ヒマラヤン・キングダムのベリー氏、そして私であった。

デイビス氏は、①スポーツ競技としての登山をどう考えるか、②世界全体の共通したデータベース作り、③環境問題をどう考えるか、をこれからの仮題としてあげていた。②についてバンド氏は、英国山岳会のデータベースをヒマラヤンクラブと協力して作った方なので、その重要性

を強調するとともに、漢字圏の情報の不備を指摘していた。

インド登山財団会長のジル氏は有名な官僚、中央選挙管理委員会委員長である。彼も環境問題を強調していた。会の進行を取り仕切っているのは、第一副会長のS・ドゥベイ氏、ダウ&ジョーンズ・インドの社長であるビジネスマン。しかし、ミレニアム会議と銘打つ割にはのんびりした進行であり、はっきり焦点が絞られているわけではない。インドヒマラヤ登山の概観を行い、これからはこの地域が小パーティーによる六五〇〇〜七〇〇〇メートルの未踏壁稜の速攻登山のベースになり得るだろう、とまとめたヒマラヤンジャーナルの編集長でもあるカパディア氏(もうひとりの副会長)の話は魅力的であったが……。

つまり会長、副会長の三人とも軍人ではないことになる。IMFも時代が変わったのであろうか。前会長のコリ氏は体を悪くしているのか、二日目にちよつと顔を出しただけであつた。しかし、将官クラスの方が多く参加していたし、細やかな心遣いをされていたインド登山財団事務局長のR・ナート氏は現職の軍人である。

カパディアさんの話以外で面白かつたのは、モトゥップ氏のギヤ登頂

報告。スピティーにあるその他のピーク情報も含まれていた。ちなみにモトゥップ氏はラダク出身、奥さんはダージリンのゴンブーシェルバ氏の娘である。ゴンブー氏もきており、「シッキムはいいぞ」と強調していた。

私の報告は大塚会長の原稿を下敷きに、ナンダコットから始まったインド山岳界と日本山岳会の合同登山を含む長い歴史と、最近の代表的な登山を紹介し、最後に簡単なまとめを行った。スライド八十枚を使い六十分くらいかかったが、古い貴重なスライドは喜ばれたように思う。

エベレストに二回登っている唯一の女性であるサントシユ・ヤダブさんが合同登山の歴史に興味を示していたほか、多くの方々と一緒にどうか、という打診があつた。

会議終了後、ラダクを訪れ、当地の長官らと会談する機会を得たが、カシミール、ラダク、中央アジア、チベットにまたがるインドヒマラヤ地域はこれからさらに興味を引くと思われる。

(増山 茂)

ポカラ国際山岳博物館：近状

二〇〇〇年末に開館の予定

ネパール・ポカラ国際山岳博物館募金に対するご支援、ご協力、誠に

ありがとうございました。

日本山岳会はじめ、日本山岳協会、勤労者山岳連盟、ヒマラヤ協会、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラス、日本ネパール協会などの団体が協力して、国際山岳博物館建設支援のために行った募金が大きく生かされ、着々と完成に近づいています。近況をご報告いたします。

建設状況に関しては、開館を二〇〇〇年の末と予定し、準備も最終段階に入りました。一九九九年内には屋根がかかり、ガラスも入ります。工事は当初の計画より遅れています。その原因の一つに屋根工事がありませんでした。屋根の大きさから重量的なことを考慮して軽量の新材に変更し、シンガポールから新たな鋼材を輸入したためというのが、ネパール山岳会の説明です。

資金に関しては、日本、韓国、インドなどの組織的支援に加え、各国からの個人的な支援も受けられるようになりました。十月のアジア山岳連盟での報告では、建物を完成させるまでにあと十二万USD(千二百六十万円)が必要とのことですが、資金調達には明るい希望をもっているようです。ネパール山岳協会(NMA)の現行のトレッキングパーミッシンの収益や、すでに約束しているドネーション(寄付)がありま

す。また新たに、七つの未解放ピークの解放を政府に要請し、そのパーミッシンの権益を充当するなどして、完成を目指したい、ということでした。

建物完成後の展示、イベント計画なども具体的な検討が始まったという情報が入ってきました。

ネパール・ポカラ国際山岳博物館の支援に関しては、昨年十月のマレーシア・マラッカ国際山岳連盟(U I A A)総会、アジア山岳連盟(U A A A)総会で、すでに可決されています。ネパール山岳協会のさらなる努力と関係諸国の支援で、早期完成を期待するところでです。

なお日本からの支援として、先の六団体によりネパール国際山岳博物館関係団体連絡協議会の名のもとに、ネパール山岳協会を窓口、に、支援、協力してきました。この長つたらしい名称を日本的に、山岳博物館を縮めた「サンパク(山博)」という呼び方で打ち合わせなどをしているうちに、いつしかネパールでも「サンパク」という呼び方に共鳴。今ではネパール関係者の間でも「サンパク」と呼ばれ、日本の強力な支援団体として好感をもたれています。連絡のたびに、「サンパクの支援者の皆さまによりしく」といわれます。

(神崎忠雄)

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

池原等・著

『とやま県境踏破』

富山県は日本海に面しているため、県境三四〇キロは、他県に比べて決して長いとはいえない。ただ、この県境はほとんどが山岳地帯である。平成元年、著者は五十歳になったのを機に、県境踏破を思い立つ。休日をやくりくりしてのチャレンジのため、七十回に分けて歩きつなぎ、全コースを歩ききるのに六年三カ月の月日がかかった。本書はその全行程の行動記録である。

この県境、残雪期に踏破されたことはあるが、著者はあえて無雪期に挑戦し、大変な敷こぎを強いられる。

その上、熊に出会ったり、名前のわからない谷（地元の古老に聞いて、初めて境谷という名前を知るのだが）の遡行に、八回目の挑戦でやっと成功したりと、エピソードに事欠かない。

だが、「こんなに大変だった」というような大げさな表現は極力抑えられ、返って著者のまじめさ、ひたむきさが伝わってくる本である。

(三好まき子)

一九九九年六月 桂書房発行 二二五ページ 二千円

野口健・著

『落ちこぼれてエベレスト』

著者は高校生活のとき、自宅謹慎中に本屋で偶然手にした植村直己著『青春を山に賭けて』に心を癒された。それから、この本を心のよりどころとしていつも持ち歩き、ついに七大陸最高峰最年少登頂記録を達成した。

最終目標だったエベレスト登頂を第一章に配し、読者をひきつける。生い立ちから全体を二十七章に分け、いずれも簡潔で読みやすい。冬富士の特訓から始まる登山体験と、いくつかの挫折を重ねた話がつづられていく。

子供社会のいじめや教育界の偏見

今年もさげんで会いましょう

など、一般社会や山岳界に若人の鋭い視線が投げかけられている。また外交官の父の影響を受け、国際感覚豊かな著者は、日本社会独特の不可解な行動や思考方法もずばり指摘している。

このような動機で冒険的登山に挑み、世界記録を残した著者が、登山活動の下積み仕事を果たしてくれた人たちの実情を目の当たりにして、彼らの生活環境改善のために、シエルパ基金設立の公言をはばからない心意気に拍手を送りたい。

岳人ばかりでなく、あらゆる人たちに読んでもらいたい好著である。

(南井英弘)

一九九九年十月 集英社インターナショナル刊 二八五ページ 千四百円

W・ウェストン・著／三井嘉雄・訳

『ウォルター・ウェストン』

未刊行著作集

本書はウェストンが多くの誌紙に発表した未刊の報告、論文などをまとめた翻訳である。出典は『アルパイン・ジャーナル』のほか『ジオグ

ラフィカル・ジャーナル』などの学会誌、『タイムズ』『アサヒ』など商業紙に書かれたものなど、全部で百四点、上下二巻の大冊となった。

上巻三七二ページ、下巻三三八ページを通して並べ方は発表年次順になっている。巻末に付された「略年表」と「発表文の表題一覧表」と合わせて整理しやすい。資料としても利用されるものと思われる。

年表については、先に本会の名誉会員、島田巽氏の提唱によりまとめられた『W・ウェストン年譜』がある。一九八七年から四年間にわたり『山岳』に連載された。その年譜ができたのは「ウェストン来日百年記念」に年譜を作ろう、と呼びかけた島田プランに、三人の研究者が参画したからといわれている。川村宏、安江安宣の両会員と、今回本書を訳された三井嘉雄信濃支部の会員で、熱心なウェストン研究家の一人。一九九五年にはウェストンの『日本アルプス登攀日記』（平凡社・東洋文庫）を訳出している。今回はこれに続く第二弾。

(杉田博)

一九九九年十一月 郷土出版社刊 菊版上下二巻セット価 七千円

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

田村氏の「なぜ、仮題『新日本山岳志』?」に答える

高木泰夫

「山」六五一号で述べたことの繰り返しになるが『日本山岳志』の中で高頭氏ご自身が、「将来碩学ノ山誌編纂セラレン時、多少ノ参考トナラシカ」と述べておられる。「編纂主旨」から見ても、ここに新しく『(新) 日本山岳志』を出版することは、氏の思いを活かすことであるとする考えに変わりはない。

そして、深田久弥氏も『山さまざま』の中で、『日本山岳志』が上梓されて以来、「日本の登山は随分発展してきたし、開拓された山々もたくさん出てきたので、一つ僕は新しい山岳志つまり完全な山岳辞典を作ってみよう」と志されたが、結局日

の目を見ることがなかったのは、「そういう仕事は片手間で出来るものではなく、僕のような怠け者には不似合いであると悟って、自然に中止してしまった」と述懐されている。さらに「誰かこの根気の要る有意義な仕事をやってくれる人がでないだろうか」と期待しておいでになるのである。

このように高頭式氏、今西錦司氏、深田久弥氏などの各先輩の遺志を体し、二年間にわたる各支部内および本部理事会での検討を積み重ねた上で決定された事業が、どうして『日本山岳会百年の歴史を冒瀆し、日本山岳会を私物化する稚拙な行為』であらうか。また、「意義ある事業を心から希求申し上げます」とおっしゃるが、それなら責任をもって比較検討すべき対案を提示する必要がある。

第二に、仮題『(新) 日本山岳志』を「後百年間の使用に耐え得るような内容にしたい」という意欲でもって刊行することが、なぜ高頭氏に対する「これ以上の冒瀆」がないほどの「無礼」になるのか。これが出版された時点で「百年間の使用に耐え得る」と自負するならば、「滑稽な思ひ上がり」と言えようが、あくまでも願望として編纂の方針に掲げた文言であることは、いまだ指摘するまでもないことである。

なお、高頭氏は和紙に毛筆で原稿をしたためられたそうだが、それが今日コンピューターに代わられたとしても何の不思議があるだろうか。むしろ問題はそのオリジナリティーにあるのであって、それは本書が出来上がり、巷間に流布されたときに評価されるべきだと考える。

本書の刊行には、編集委員会を中心に数多の会員諸賢のご協力を得て世評に十分耐え得るものを作りたいと考えている。ぜひご理解を賜りたいものである。

藤木九三さんの葉書

開発秀三

写真は山岳切手収集仲間の知人が、フリーマーケットで入手した興味深

い葉書です。これは藤木九三さんが大正十五年八月三十一日、秩父宮雍仁親王が、スイス・アルプスのマッターホルンに登頂されたのに随行して、その翌日に発信された葉書という、日本山岳史の中の一刻を示す証拠品です。写真では読みづらいと思いますが、書かれている文章を再録しますと次のとおりです。

「大阪市西区鞆南通一丁目十三 小森太郎様

「とうとう遣りました」などといふとしかられますが、実際そんな気がします。何の事が判らないでせう。実は今MATTERHORNを登って降りて来た処なんです。九月一日

「一人では行けない、でも行きたい。」
それにお応えするのが実体験に基づいた
アルパインツアーの旅づくりです。

ネパール・ヒマラヤ・トレッキングのつどい

ビデオ・スライドで各コースご紹介現地に詳しいツアーリーダーが説明します。

東京: 2月3日(木) 18:30~20:30 大阪: 2月1日(火) 18:30~20:30

退蔵会機構ビル(旧中退金ビル)8階 大阪科学技術センター405号室

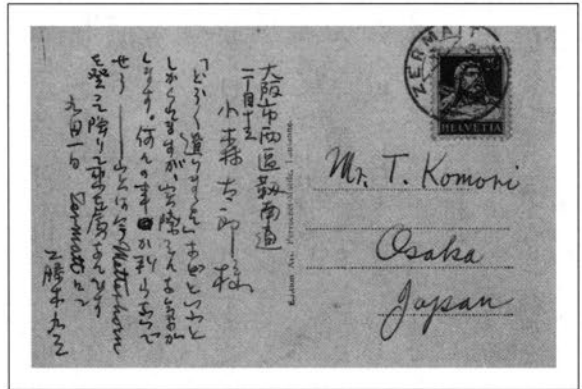
名古屋: 2月3日(木) 18:30~20:30 福岡: 1月27日(木) 18:30~20:30

名古屋国際センター3階第1研究室 JTキャビンホール

運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員

アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444) 3033 名古屋 ☎052(581) 3211 福岡 ☎092(715) 1557



ZERMATTに

藤木九三

と書かれています。そして、スイス切手の上に押された消印も ZERMATT 1926・9・1 と読むことができます。

藤木さんはRCC（ロック・クラ イミング・クラブ）結成（大正十三年六月）の中心人物として著名ですが、このときは、朝日新聞からの特派記者で、ツエルマットには先着して殿下のご一行をお待ちし、以後、登頂メンバー総勢十三名（後述）の一員として、マッターホルン登頂に随行していました。

この文章は、八月三十一日の深夜、午後十一時十分ごろにツエルマット

のモンセルヴァン・ホテルに帰着し、直ちに本社への報告原稿を起稿された後引き続いて書かれたものか、あるいは一睡された後、九月一日の午前に書かれたものかはわかりませんが、皆さん、この文章からは藤木さんの息の弾みが伝わってくるような名文だとお感じにはならなかったのでしょうか。私には、藤木さんの感じられた興奮が生々しく伝わってくるような気がします。したがって、私は前者ではないかと独断ですが判断していますが、いかがなものでしょうか。

最後に、登頂のメンバーと、マッターホルン登頂記録の要点を記して筆をおくことといたします。

登頂メンバー

秩父宮殿下、横有恒、渡辺八郎、松方三郎、松本重治、藤木九三、ほかガイド七名、計十三名

登頂の経過 一九二六年（大正十五年）

八月二十九日 ツエルマットのモン

セルヴァン・ホテル泊

八月三十日 午後三時ホテル発 ベ

ルベデル・ヒュッテ泊（三三〇

〇メートル）

八月三十一日 午前三時 ベルベデ

ール・ヒュッテ発 ヘルンリ尾根

を登る 八時二十分頂上着
イタリア側稜線を下り、コル・

ド・リオン氷河（ブロイルヨッホ（三三七メートル））（シュワルツゼーホテル（二十時夕食））（二十時十分 ツエルマット モンセルヴァン・ホテル着（この日の行動時間二十時間十分））

九月一日 休養日

藤木さんはこの後、九月二日から八日までご一行の山行に随行し、九月九日、殿下がロンドンに向け出発されるのを、ツエルマットでお見送りしています。

「ラリグラス植林プロジェクト」に参加しました

原田久江

突然私の目が、「山」六四九号のネパール「ラリグラス植林プロジェクト」参加者募集の文字の上で止まったのです。

九月も終わろうとする日、一通の葉書が飛び込んできました。「ラリグラス植林計画」です。十月二十四日（十一月五日までの日程が組んでありました。「なに、なに」もう一月もない？ バタバタと事は進み、出発の日を迎えてしまいました。同行者は大森さんと大船フラワーセンターの大石さん。お二人には一面識もなく、何もかもが初体験のことだ

けに、不安と緊張でいっぱいでした。ピートモスや移植用のビニールポットなど大荷物を携えて、大森さんとカトマンスに着いたのは二十四日十一時半過ぎ。十月下旬の日本ではもう忘れかけていた強い日差しと、わからない言葉の波が私をカッとさせましたが、出迎える日本語学校のシャムさんともすぐに打ち解け、別便の大石さんと合流後、パタンの苗床に向かいました。

前に畑が広がり、その先は現地の人々が昔ながらのやり方で稲の脱穀をしているようなおらかな場所に、日本山岳会の苗床がありました。シヤクナゲの小苗がたくさん並んでいます。大森さんの顔が懐かしげにほころびます。順調に育っているもの、元気のないもの、枯れてしまったものの、さまざまでした。日本から運んできたという多様な道具、肥料、植え土など、この小さな苗を花の咲く大きな木にするための手助けを、私たちの手で成功させようとするこの仕事に意欲を感じました。

明るい丘のようなシバプリには、日本山岳会が地球環境基金で植林しているという「木を植えましよう」とネパール語で書いた何本もの立て看板があり、ラリグラスと一緒にほかの木も何種か植えて実験しています。かなり離れた水源から水を引

短歌

西方ヶ岳

加賀要子

雪代の落葉をわけて鳴る水を聞きつつ山径を登りはじめぬ

先にたち登りし犬の導きにこの西方ヶ岳を越えし日ありき

白晒れし枯木より瑞々と平茸は両の手にあまるまで

雪撥ねて枝立ちかえるタムシバの揺れつつしがし絮毛の露の

原子力発電所よりの高圧線伸びてゆく半島の雪山の空

白山を閉ざす奥越の厚き雲思いそれそれに恋い仰ぐなり

雪山のいく重のはてに雲去りし椿峠を君は指さす

鶴色の海と五つの凍る湖ただ茫々と地平は昏るる

冬木々もかんじき履きし我が影も淡く伸びたり夕べの雪に

冬風ぎの入江の小さき船付場真斑雪にかもめの群のしずけし

き撒けるようにしてあります。この何もない場所に素人の手でここまでする間には、いろんな苦労があったと聞きましたが、並大抵のことではないと、胸の熱くなる想いでした。

シバプリの管理事務所にある苗床は素敵です。自動散水機が見事に作動しています。ここでも数百メートルも先の川からホースを引いて小さな苗に散水するのです。きれいな霧になって満遍なく与えられる水で、苗は植林するまでに育つのです。

次はフラワーセンターの大石さんの出番です。蒔き床の土の準備から条件を変えての種まき、シバプリ植林地に植林する苗を選ぶことから植え付ける場所の選定、植え方の条件などの新しい方法、大石さんの作業は一つ一つ納得のいくもので、これなら絶対うまくいくと思えるような説得力がありました。

大森さんが、百年後のネパールはラリグラスで赤く染まると信じて生きる、という気持ちに私も伝わってきました。また、シャムさんはじめ現地で毎日あらゆる世話をしている人々の、ラリグラスに対する愛情が見えてうれしく思いました。

晴天の十二日間、ヒマラヤの山々を遠くに見ながらシバプリに通ったとき、排気ガスで汚染された町の環境問題や、地球上の生きとし生ける

ものすべてのことを考え、私たち山好きの人間がなすべきことの多さを感じました。ネパール人の毎日の生活に、私たちがとづくに忘れ去ってしまった大切なことに何度も出会い、考えさせられました。一人の力ではどうにもならないことでも、同じ考えの人が集まれば何かの形になるような気がしました。最後に、何の役にも立たない私を快くご指導くださったお二人に感謝いたします。

カナダ・バンフで山岳図書、山岳映画祭開催

益田幸郎

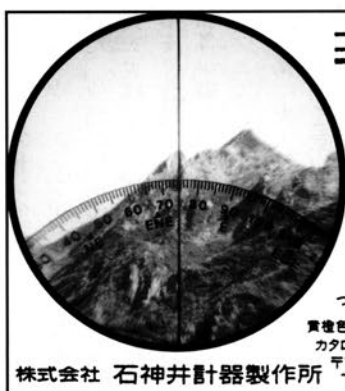
十一月三日から七日まで、カナダのバンフで第六回山岳図書祭、第二十四回山岳映画祭が開かれた。会期中は講演、映画上映、セミナー、トレッドショウなどが連日行われ、一万人の観客は各国から招待されたクライマー、山岳関係者とともに盛り上がり上っていた。日本からは田部井淳子さんが映画祭の審査員として参加された。

山岳図書祭はエントリー百二冊、入賞作品は九カ国、最優秀賞はカナダ、ポール・プリチャードの「The Totem Pole」、山岳文学賞はカナダ、シド・マンティの「Switchbacks」

その他山岳エクスポジション賞、山岳イメージ賞、冒険旅行賞も選考された。

山岳映画賞は二十二カ国、百三十八本のエントリー作品の中から最優秀賞に「Vision Man」スエーデン、山岳スポーツ賞に「118Days in Capacity of Ice」スロバキア、その他山岳環境賞、山岳文化賞、クライミング賞、特別審査員賞、鑑客賞なども選ばれた。

二〇〇〇年は十月二十八日から十一月五日まで開催される。山岳映画祭は二十五周年を記念して、過去のゲスト三十人が一堂に会して「マウンテン・サミット」会議が開かれる。



株式会社 石神井計器製作所

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのままだ正しい磁気方位です。

重量78g.

つや消し黒	¥17,000	送料 ¥ 600
黄銅色メタリック	¥18,000	消費税別

カタログ代無料、電話、FAX、来書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

越後支部

「高頭祭」と「新潟県登山祭」 一日で二つの祭りを楽しむ

弥彦山(六三八メートル) 大平園地に温顔をたたえつつ、日本山岳会の創立者の一人で、二代目日本山岳会の会長、高頭仁兵衛翁の寿像碑がある。

寿像碑は、高頭翁の日本山岳界の発展に尽くされた功績をたたえとともに、古希を越えますますお元気で過ごしてであることを祝って、翁が十三歳で初めて登った弥彦山に、昭和二十五年建立されたものである。毎年七月二十五日には、越後支部が主催して、翁の遺徳を慕い「高頭祭」を執り行っている。眼下には越後平野と日本海に浮かぶ佐渡島を望



大平園地の寿像碑前で行う「高頭祭」 撮影・山崎幸和

みながら、午後三時三十分からお祭りが挙行される。今年は本部から大塚博美会長が来駕された。お祭りが終わると、碑前の芝生で翁の功績を偲びながら杯を傾けるのである。「高頭祭」は本年度で四十二回を数える。やがて赤い夕日が日本海に沈むころ、翁の碑前に別れを告げて、山頂の彌彦神社と神廟に向かう。この日第二の行事、「新潟県登山祭」の開幕である。

日本三大火祭りの一つ「彌彦神社燈籠まつり」に協賛して、越後支部と新潟県山岳協会および弥彦山岳会

の共催で「新潟県登山祭」が開催される。山頂から松明を手に弥彦山を下るのである。支部会員はもちろんのこと、一般登山者の老若男女たちが手に手に赤々と燃える神火の松明をかざし、彌彦神社へと向かう。その数四百余人、午後八時、彌彦神社拝殿に到着。

全員松明を手に掲げて拝礼をし、燈籠まつりににぎわう市巾着を行進するのである。行進の終了には、弥彦体育館でビール栓が抜かれ、参加者全員で乾杯をして、来る年の七月二十五日の再会を誓うのである。「新潟県登山祭」も回を重ね四十六回となった。

弥彦山に高頭仁兵衛翁の寿像碑が建立されて以来、七月二十五日の「高頭祭」と「新潟県登山祭」には本部の歴代会長が来山してお祭りに参加され、講演をさせていただいている。会員の皆さま方も来年はぜひ来山され、「高頭祭」「新潟県登山祭」に参加されてはいかがですか。お待ちしております。(渡辺宣衛)

信濃支部

第三回ミセス・ウェストン祭 百名が碑前に集う

八月一日、第三回ミセス・ウェストン祭が長野県戸隠村の戸隠高原ミ

セス・ウェストン・パークにあるミセス・ウェストン記念碑前で開催された。快晴の碑前祭には、小倉副会長夫妻はじめ田畑真一会員および信濃支部会員十三名を含む百名近い参加者が集まった。

ウェストン夫人が外国人女性として初めて女人禁制の霊山、戸隠山から高妻山を登山されたのは明治三十七年八月、今から九十五年前のことになる。

式典では、小倉副会長、田畑会員による献花、白石みきさんの「遙かなりミセス・ウェストン」をガールスカウトが献歌、主催者の横川欣一村長の挨拶、来賓が祝辞を述べた。続いて田畑会員が「ミセス・ウェストンはなぜ戸隠へ」と題して記念講演、夫妻の戸隠とのかかわりについて熱心に話された。ミセス・ウェストンにちなむ思い出話として、終焉の地と墓地、旧居などを訪れた様子、また「なぜ戸隠へ」ということは、本人自身が登山家であり、夫のウェストンから登山の情報を得ていたという話だった。

最後に戸隠小学校の児童により「マーチングバンド」の演奏があり、閉会となった。

戸隠神告げ温泉での懇親会では、小倉副会長夫妻はじめ、塚本会員、戸隠小屋の佐々木会員、早乙女会員

などから懐かしい海外遠征の思い出や最近の山行など、山麓清談が交わされ懇親が図られた。

早乙女会員からは「第三回ミセス・ウェストン祭に出席して」と題して早々と感想文が手渡された。会員から記念山行を含めた今後のミセス・ウェストン祭への参加と、女性会員の参加増について、意見や指導をいただいた。初参加の高野会員の自己紹介と山談義が続く中、地酒と山菜料理に全員満足しながら散会となった。

(金子誠吾)

岐阜支部

第二十六回山岳講演会 今西生物学のころ

十一月十一日、長良川スポーツラザにおいて、故今西錦司元会長の次男宇治日出二郎氏を講師に招いて「自然とともに今西生物学のころ」をテーマに講演会を開催した。会場へは、会員、会友、および一般の方々が交えて、百人余の聴講者があり盛会であった。

宇治講師は、民俗学の研究に携わり、現在千里文化財団常務理事を務められている。今回は息子から見た父、今西生物学のころを話していただいた。

生物は、種類によって時間差や場



講師は今西元会長の次男・宇治日出二郎氏

所の違うところで棲み分けて共存しているという「棲み分け理論」を展開した今西さんの学説を説明。同理論は、京都の自宅近くの鴨川でカゲロウの生態を調べていて、偶然に発見したなどのエピソードと、また、欧米の文献を鵜呑みにせず、自分の目で見て確認しないと承知しなかった今西さんの研究スタンスを振り返り、「フィールドワークこそが研究の根幹」とした今西さんの研究を話してくださった。

聴講した会員たちは、今西さんの元氣なころ、ともに登山した往時を偲びつつ、今西さんの学問体系を熱心に聞き入った。

(清水芳彦)

宮崎支部

第十五回宮崎ウェストン祭 と筒ヶ岳記念登山

■ 錦秋の筒ヶ岳登山

日本山岳会生みの親であるウォルター・ウェストン師が祖母山に登山したのは、明治二十三年(二八九〇)十一月六日、今年で百九年となる。宮崎支部の発足を記念して、宮崎ウェストン祭は十五回を数えた。山を愛する人々の心のシンボルとして追慕の鐘を鳴らし、感謝の花束を捧げた。

ウェストン祭前夜祭に参加する会員二十三名は、祖母山の前衛峰・筒ヶ岳(二九六メートル)の錦秋を味わうため、十一月二日午前六時宮崎市を出発。四時間三十分を要して林道口に到着。この山のオベリスクの岩峰を仰ぎながら林道を五十分歩き、登山口に着く。ここからスギ・ヒノキの人口林の濃緑と地皮類に雑草もない濃茶一色の中を黙々と高度を稼ぐ。急登に誰もが吐息の交響楽を弾ませる。

七合目、目前の風景が一変する。錦繡に塗り替えられた二次林のブナ・ケヤキ・カエデ類にモミ・ヒメコマツの緑のコントラストが鮮やかで驚嘆、絶賛の言葉が飛び交う。十二時二十五分、アルミ梯子をよじ登



宮崎ウェストン祭 碑前で大塚博美会長と宮崎支部員

り、円筒形の筒ヶ岳山頂に立つ。三六〇度の眺望は阿蘇連山をはじめ久住連峰はほしいままで、祖母山は八合目から山頂は霧氷の銀世界を演出していた。

■ ウェストン前夜祭の感動

前夜祭は田原地区振興会、高千穂山の会が中心となつて神事に始まり、大塚博美会長らが玉串奉奠、子供神楽、大人神楽、五ヶ所小学校全校生徒二十五人の合唱、さらには小学生、中学生、大人太鼓が奉納され、参加者の感動を呼んだ。

余興の太鼓打ちには大塚会長の飛び入りもあつて観衆の拍手を浴び、高さ約一〇メートル余の井桁に組ま

れた巨大なキャンプファイアーにカップルのトーチから点火されると、火柱となつて空を焦がした。また、カッポ酒が振舞われる中で、宮崎支部会員の「日向ひよつとこ踊り」が会場の爆笑を誘い、前夜祭は一挙に盛り上がりを見せた。前夜祭終了後、大塚会長を囲んでの座談会では、会長の豊かな体験談に耳を傾け、感嘆の声がしきりであった。

■華を添えたミニ講話とヴァイオリン演奏

十一月三日、文化の日。ウォルター・ウエストン師を顕彰して第十五回宮崎ウエストン祭は、師のレブリカのある高千穂町三秀台で約三百人（熊本・東九州・東海、宮崎各支部・小学生・一般）の参加を得て開かれた。

小学生の点鐘、献花に始まり、高千穂町長、大塚会長の挨拶、小学生のエーデルワイスの歌合唱、吉田直人会員のミニ講話「ウエストン師と二十一世紀の環境」に自然保護の大切さとなすべきことの必要性を自覚させられた。会友黒田印南さんのヴァイオリン演奏。「チャルダッシュ、ユーモレスク」の繊細な音色は感動を呼び、アンコールに呼んで「故郷」が演奏された。

式典終了後、会員は大塚会長に同行してウエストン師が登ったであろうコースの千間平、三峯境、国観峠を経由し、晩秋に汗を流して祖母山（一七六五メートル）山頂に立った。二日間の自然や地域の人々、岳友との触れ合いによる感動は、胸に迫るものがあつた。

（井野元繁）

図書受入報告 (1999年11月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
松本征夫（編著）	遥かなり秘境可西里（ココシリ）：崑崙を越えて	278pp/22cm	日本放送出版協会	1999	著者寄贈
廷文社文化（編）	韓国の国立公園（National Parks of Korea）	142pp/26cm	国立公園管理公園	1999	ムン・ヒサン氏寄贈
田酒行男（詩） 中原健二（作曲）	山の季節〔楽譜〕：女性合唱組曲	63pp/27cm	音楽之友社	1997	著者寄贈
山田学	路傍：山田学写真集	72pp/21cm	光琳社出版	1993	山田晚氏寄贈
山田学	路傍（Ⅱ）：山田学写真集	78pp/21cm	岐阜新聞社	1996	山田晚氏寄贈
山田学（著） 川端春枝（編）	余滴：山田学写真集	47pp/21cm	山田晚（私家版）	1999	山田晚氏寄贈
田口二郎	山の生涯（上巻）：来し方 行く末	357pp/22cm	茗溪堂	1999	出版社寄贈
野口健	落ちこぼれてエベレスト：7大陸最高峰世界最年少登頂	285pp/20cm	集英社インターナショナル	1999	著者寄贈
甲南山岳会・山岳部（編）	センチネル峰登山・ヒンズークシ踏査報告書 1999年	27pp/30cm	甲南山岳会・山岳部	1999	発行者寄贈
増田欣子	画歴の山々（画文集）：穂高からヒマラヤへ	94pp/20cm	恒文社	1999	出版社寄贈
福田和美	日光鱒釣紳士物語：The Story of Old Anglers in Nikko	255pp/22cm	山と溪谷社	1999	出版社寄贈
渡辺久樹	地球とにらめっこ：アジア、アフリカ子連れ旅	251pp/19cm	山と溪谷社	1999	出版社寄贈
中高山の会（編）	絶景！！ 富士山と花を眺める百名山：中高年のための登山術	254pp/20cm	講談社	1999	出版社寄贈
大山の頂上を保護する会（編）	大山の頂上保護活動1996：10年のあゆみ	86pp/31cm	大山の頂上を保護する会	1996	発行者寄贈
白山書房編集部（編）	百名山パノラマ案内	212pp/19x26cm	白山書房	1999	出版社寄贈
M. Beek, K. Bertelsen & P. Pedersen (eds.)	LADAKH: Culture, History & Development between Himalaya and Karakoram	414pp/25cm	Aarhus Univ. Press	1999	購入

会務報告

十一月理事会

日時 十一月七日 十八時三十分～

二十時四十五分

場所 日本山岳会会議室

「出席者」大塚会長、小倉、大森、竹内各副会長、西村、村井（龍）、森、宮崎、高原、勝山、村井（葵）、南川（高遠代理）、藤井（宮下代理）、鰺坂、松原、増山、坂井、河西、山本各理事、神崎、中村各監事、平山中川、平野、田邊、吉永各常任評議員

「委任」坂本理事

【審議事項】

- 一、第二回秩父宮記念山岳賞（竹内）十月二十五日開催の審査委員会より「本年度は受賞該当案件なし」との報告を受け、運営委員会は本年度の授賞を見送ることにした。承認
- なお、運営委員会は本賞の一層の活性化を図るため、運営審査について改定案をまとめ、一年度の理事会に諮りたい。十二月十三日、次の運営委員会を開催するので、各役員からの意見をお願いしたい。
- 二、アルバータ・プロジェクト二〇〇〇の計画（大森、増山、熊崎）別添え計画書により実施。承認
- 三、図書利用規定の改定等（村井龍）

①月曜日休室日の廃止

図書室は基本的には、事務局開催時にはいつでも利用できるものとする。理由は

- 第二、第四土曜日の閉室に伴い利用時間が縮小された。
- 週明けは来室者が多く、地方会員の利用率も高い。
- 月曜日に閉室しても業務上何の支障もないと考えられる。

②図書管理委員会の名称変更

今後は「財務委員会・図書管理小委員会」とする。ただし、各委員は現行どおり「図書管理委員」とする。

③変更事項は年末発行の「日本山岳会会員名簿」に掲載する。承認

④その他、図書室内における禁止事項（図書室内での飲食、会議、図書貸し出し）の徹底を図りたい。

四、平成十二年度年次晩餐会写真展企画（西村）

全国の会員を対象に、公募により作品を集めて審査し、晩餐会で展示する。詳細は実行委員会を設置して決め、理事会に諮る。この作品は地方支部へ巡回する。承認

五、写真貸し出し許可二件（西村）

- ①朝日新聞社「週刊二十世紀」一九二二、二三年号（平成十二年三月九日発行）へ、アイガー東山稜登頂後の横有恒一行の写真掲載願ひ。承認
- ②J R東日本社内サービ誌「トラ

ンヴェール」一月号（平成十二年一月一日発行）へ河童橋のウエストン夫妻の写真掲載許可願ひ。承認

【報告事項】

- 一、平成十一年度の名誉会員は十月三十日開催の第二回評議員会の検討結果、斎藤惇生会員を推薦。
- 二、平成十一年度永年会員は平山武志（二八三七）他二十九名。
- 三、日中友好登山二十周年記念事業は平成十二年実施に向けて、西村（世話役）、村井龍、増山、坂井各理事、橋本清海外連絡委員のメンバーで、記念事業案をまとめ、理事会に答申する。承認され次第メンバーを増強し、実行推進組織に切り替える。

四、九月理事会で問題提起された当会ホームページの内容、体制についての答申案（平成十二年三月理事会へ提出）を森（世話役）、高原、鰺坂、増山各理事、三上データバンク研究会委員で作成する。（以上西村）

五、日中友好登山二十周年記念行事について、中国登山協会と打ち合わせを行い、お互い事業推進の体制を整え、情報交換しながら、行事には多くの人が参加できるようにすることと合意。

六、北京大学山岳部は部員百二十名、部室等も完備し、岩登り人工ゲレンデまである。

●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円（税込）

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

●深田クラブ編●

深田久弥の研究

読み、歩き、書いた

飯島斉 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円（税込）

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社

東京都北区滝野川 7-6-13

電話・FAX 03(3915)8110

月末に屋根、ガラスを取り付ける。完成までに千二百万円不足、ネパールは外貨獲得のため、七ビークを解禁する。また、韓国、ヨーロッパ諸国、インドなどから援助の予定があるとのこと。(以上神崎)

【委員会報告】

資料委員会・鯉坂

第三回全国山岳博物館等連絡会議を十月三十日、東京都写真美術館において十四の博物館等の館長、学芸員の参加で開催した。

科学委員会・森

①マッキンリー気象観測機器設置登山隊の終了に伴う今後の諸問題について、来年(平成十二年)六月最終記録(十年目)の回収をもって、国際北極圏研究センター(IARC)への受け渡しを完了し、この計画を終了する。

②フォーラム「登山用具の新知識、選び方と使い方」を十一月二十七日十三時より明治大学で開催の予定。

ミニ水力発電計画実行委員会・森

十一月四日着工、十八日建物が完成し、二十日より二十三日にかけて発電機の設置および試運転を予定。来年の実施データを取るため、この委員会は継続する。

総務委員会・西村、高原

①本年度年次晩餐会は十一月初旬開催通知送付、現在返信到着中。

②平成十一年度上期新入会員オリエンテーションをルームで十月二十日開催。出席者四十三名。

③会員名簿は十二月四日配布予定。広告料収入は百四十万円。

④支部長会議を十二月四日十二時より開催する。議事は

●第二回秩父宮記念山岳賞について

●名誉会員、永年会員について

●全国支部懇談会の開催予定

●平成十二年度年次晩餐会写真展企画について

●会務報告(会計状況、ミニ水力発電、海外登山基金応募、支部に関する「山」の記事)

●弔意規定(昭和四十八年六月十一日より実施)の確認

指導委員会・松原

十一月五七日、文部省登山研修所で岩登り研修会を実施。

海外連絡委員会・増山

十一月のインド登山財団(IMF)総会の出席は、政情不安のため大塚会長は取りやめ、増山一名が出席。

会報編集委員会・村井葵

十一月号は「日中学生友好登山隊・雪宝頂」「高所テントの歴史をたどる」。支部コーナーにほとんど投稿のない支部もあるので対応を考える。

図書委員会・藤井

「山岳史懇談会」は「同志社大学山岳

部七十年の歩み」を平成十二年二月十八日、平林克敏会員の講師で開催。

「山岳」編集委員会・南川

十一月三十日納品予定。今号は三六八ページ。

財務委員会・村井龍

会計状況はほぼ予定通り。今期の新入会員は二百六名、現在の会員数は五千九百九十一名。

会計監査報告・神崎、中村

十月三十日上期の会計監査を実施した結果、特に問題はないが、留意事項として

●一部交通費等明細を欠くものが見受けられる。

●「基金」をいい意味で活用できるよう見直しを図る必要がある。

●特定プロジェクト(外部より補助金のついているもの)は特別に監査を行ったほうがよいのではないか。

■会員異動

物故

鳥居亮	(一九三四)	99・9・11
長崎達夫	(三八三)	99・11・1
今野實	(二〇七)	99・11・6
矢田目昇	(六八二〇)	99・11・8

ルーム日誌

11月

1日	総務委員会	新日本山岳志編集委員会
2日	アルパインスケッチクラブ	
4日	アルパインスキークラブ	
5日	学生部	山の自然学研究会
6日	アルパインフォトクラブ	
8日	新入会員オリエンテーション	
9日	総務委員会	アルパインスキークラブ
10日	常務理事会	二火会
11日	インスケッチクラブ	アルパイン
12日	理事会	新日本山岳志編集委員会
13日	員会	会報編集委員会
14日	学生会	93同期会
15日	学生会	データバンク研究会
16日	アルパインスキークラブ	
17日	トイレシンポジウム小委員会	
18日	総務委員会	山げらの会
19日	百年史委員会	フィルムビデオ委員会
20日	才委員会	集委員会
21日	対策委員会	
22日	三水会	山研・ミニ水力発電
23日	合同委員会	アルバータ実行委員会
24日	委員会	アルパインスキークラブ
25日	科学委員会	学生部
26日	資料委員会	
27日	集委員会	
28日	学生会	98同期会
29日	図書委員会	自然保護委員会
30日	アルバータ実行委員会	

11月来室者659名

INFORMATION



イラスト・村上直温

◆第二回「森の勉強会」(予告)

東海・京都・関西三支部
自然保護委員会共催

美しい日本の山の特長である自然林を見る目を養い、自然保護を考える講座と山行の会です。今回は三支部の他に会員全般からも募集します。
日時 五月二十日(土)～二十一日(日)
十九日夜現地集合
日程と場所

- ①宿泊・座学と現地実習(山行二十日)「朝日の森」研修所 滋賀県朽木村
- ②現地実習(山行二十一日)

資料を受け入れました

十一月三十日、当会名誉会員・川崎精雄氏より、写真の寄贈を受けま

芦生の森(京大演習林) 京都府美山町

テーマ「森の植生と生態系、二次林と遷移(座学)」
「自然林の構成と樹種の観察(山行)」

講師 専門家とインストラクター

(複数)を交渉中

定員 十五名(予定)

参加費 一万八千円(予定、二泊五食) 交通費は各自負担

問合せ 東海支部自然保護委員・猿山昌夫(〒五二〇・〇八六四)

大津市赤尾町二七・一二

FAX・〇七七・五三四・七二四

三)へFAXかハガキで

*詳細は次号でお知らせします。

◆第九回「山好きの山の絵展」

アルパインスケッチクラブ

油絵、水彩、版画、ガラス絵などの山岳画、約百点の力作を展示します。ぜひご覧ください。

会期 二月二十日(日)～二十六日(土)

会場 交通会館二階(東京・有楽町)

TEL・〇三・三二二五・七九六二

した。昭和二十九年五月一日に越後

駒で撮影したもので、高頭仁兵衛氏

武田久吉氏、もちろん川崎氏本人も

含む集合写真です。

貴重な資料として大切に保管しま

す。

資料委員会

◆ストレッティング講座 山げらの会

ストレッチと、器具を使わない筋

肉トレーニングのエクササイズです。

日時 二月二十三日(水)、三月八日

(水) 十八時三十分

場所 山岳会ルーム

連絡先 三井(Tel&Fax・〇三・三四五一・五三八八)

敷物持参、軽装でお出かけください。

◆国際ボランティア隊員募集

ヒマラヤングリーンクラブ

山登りでお世話になったヒマラヤ

の人々へ、できることから始めてみ

ませんか。

内容「対象者」

①植林(ポプラ、ヤナギ、果樹など)

②教育(女性の手芸指導、衛生指導)

③医療、健康診断、疾病治療

④自然エネルギー発電、簡易浄水工

事など「専門家、一般」

期間

春隊 A班三月二十日～四月七日

B班三月二十日～四月十日

C班四月三日～四月二十八日

D班四月七日～五月五日

問合せ・申込 遠藤京子(〒五二〇・〇八四三)

大津市北大路

三・一五・七 Tel・〇七七・

五三四・〇九二一

◆編集後記

西暦二〇〇〇年の扉が開かれました。おめでとうございます。二十一世紀まであと一年。この世紀末をアグレッシブに過ごしたいと思います。振りかえると二十世紀は人類史上稀に見る激動の時代、世界の登山界もその潮流の中にあつたと思います。二十世紀半ばにアンナプルナに登られたのを皮切りに全八千メートル峰は人跡を許し、エヴェレストの登頂者は千人を超え、日本人の八千メートル峰サミッターも延べ五百五十人に及ぼうとしています。この加速度的進展は混沌ではなく調和であつて欲しい。フェアを旗印にしたスーパークライミングも人の純粹な希求と信じます。チャレンジ精神は失つてはならないが、無知による事故は断じて避けねばなりません。

年頭にあたり会員の皆さまのご健康と安全登山を祈願します。(村井)

日本山岳会報 山 656号

2000年(平成12年)1月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社